

昨年末、ほとんど雪のない大規模な光景が、午後3時過ぎから様変わりした。無数の雪片が視界を覆い、半日後の元日午前3時までには16センチ、24時間後の午後3時までには41センチの雪が降った。除雪すれども雪の厚さは変わらない。しばしば天を仰いだ。

青森市は2024年から25年にかけて記録的な豪雪に見舞われ、累積降雪量は66.9センチに達した。

市は除排雪体制を見直し、今シーズンはいくつかの新たな取り組みを始めていた。にもかかわらず、暮れの少雪に肩透かし…と思っただら「いつもの冬」が待っていた。雪との闘いは青森市の宿命だ。

「人口約30万人を擁する都市としては、国内外でも有数の豪雪都市」は記す。近年は、海外の気象会社のデータを根拠に「人口10万人以上では世界一の豪雪都市」という言葉も市内で語られ始めた。その表現には、自虐と屈折したプライドが入り交じる。

# 座標



東北大の学生時代、気候学を学ぶ。雪にも強い関心を抱いてきた。だが、雪と向き合うほど、関わる領域の幅広さと構図の複雑さにため息が出る。自然現象としての降雪は近年、経験則が通じない事例が増えている。気候変動に伴う海水温の上昇や、大規模な大気の振る舞いの変化が背景にある。「温暖化」という言葉とは裏腹に、大雪の回数は増え、しかし雪解けはどんどん早くなっている。

一方、地域社会で雪への備えを直撃するのが、全国でも先端を行く勢いで進む人口減少と高齢化

## 暮らしを守る覚悟持とう

だ。土木・建設業界の縮小に伴い、除排雪に専業体制で従事できる業者が減り、重機のオペレーター確保が課題となっている。住民側にも目を向ければ、単身高齢者が増え、地域全体が古い、人力での除排雪能力も落ちていく。加えて、住民同士の絆が弱まっていく。

暮らしと雪を巡っては、ICT（情報通信技術）、特にSNS（交流サイト）が存在感を増している。雪雲の位置や動き、降雪の強さ、各地の風向・風速・積雪量といった情報を、誰でもリアルタイムで入手し、共有できる。AI（人工知能）を使えば、一瞬である程度の解析が可能だ。雪に埋まっても、SNSで助けを呼ぶことができる。反面、除排雪への苦情が増幅され、攻撃的になっていく過程を目にすることも少なくない。いや応なく「光と影」を感じさせる。

ほかにも、雪問題には理解や対策が難しい要因がいくつも絡み合っている。根本的な解決は容易ではない。

青森大社会学部教授

櫛引 素夫

（青森市）

それでも、雪にどう向き合おうかは問われ続ける。雪のある暮らしを嫌い、青森市を後にする若者は少なくない。雪対策は重要な「人口減少対策」。そんな位置付けと覚悟が欠かせない。

◇ くしぎみ・もとおさん 1962年



青森市生まれ。東北大学大学院理学研究科博士前期課程修了。東奥日報記者時代、弘前大学大学院で博士号（学

術）を取得。青森大社会学部准教授を経て、2016年から現職。「人口減少社会の再デザイン」をキーワードに新幹線などを研究。25年には青森市除排雪検討会議で座長を務めた。

## 豪雪と人口減対策